夏目漱石　名は金之助。文學博士。大正五年歿、年五十。

一四　猫の臨終

夏目漱石

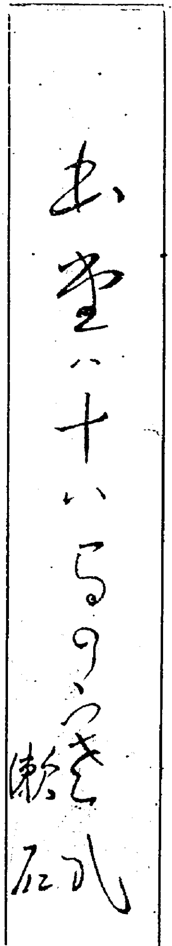
「陶然とはこんな事を云ふのだらう。」と思ひながら、あてもなくこゝかしこと散歩する様な、しない様な心持で、締りのない足をいゝ加減に運ばせて行くと、

何だか頻りに眠い。寢てゐるのだか、歩いてゐるのだか、判然しない。眼はあける積りだが重い事夥しい。かうなればそれ迄だ。海だらうが、山だらうが、驚かないんだと、前足をぐにやりと前へ出したと思ふ途端、ぼちやんと音がして、はつと云ふうち、――やられた。どうやられたのか考へる間がない。只やられたなと氣がつくか、つかないのに、あとは滅茶苦茶になつて仕舞つた。

我に歸つたときは水の上に浮いてゐる。苦しいから爪でもつて矢鱈に掻いたが、掻けるものは水ばかりで、掻くとすぐもぐつて仕舞ふ。仕方がないから後足で跳び上つておいて、前足で掻いたら、がりと音がして纔かに手答があつた。漸く頭だけ浮くから、どこだらうと見廻すと、吾輩は大きな甕の中に落ちて居る。此の甕は夏迄水葵と稱する水草が茂つて居たが、其の後烏の勘公が來て、葵を食ひ盡くした上に、行水を使ふ。行水を使へば水が減る。減れば來なくなる。近來は大分減つて、烏が見えないなと先刻思つたが、吾輩自身が、烏の代りにこんな所で行水を使はうなどとは思ひも寄らなかつた。

水から縁迄は四寸餘もある。足を伸ばしても屆かない。跳び上つても出られない。呑氣にして居れば沈むばかりだ。もがけばがり〱と甕に爪があたるのみで、あたつた時は少し浮く氣味だが、すべれば忽ちぐうつともぐる。もぐれば苦

しいから、すぐがり〱をやる。其のうちからだが疲れて來る。氣は焦るが、足は左程利かなくなる。遂にはもぐる爲に甕を掻くのか、掻く爲にもぐるのか、自分でも分りにくゝなつた。


夏目漱石筆蹟

其の時苦しいながら、かう考へた。こんな呵責に逢ふのは、つまり甕から上へあがりたいばかりの願である。あがりたいのは山々であるが、上れないのは知れきつてゐる。吾輩の足は三寸に足らぬ。よし水の面にからだが浮いて、浮いた所から思ふ存分前足を伸ばしたつて、五寸にあまる甕の縁に爪のかゝり様がない。甕の縁に爪のかゝり様がなければ、いくら藻掻いても、あせつても、百年の間身を粉にしても出られつこはない。出られないと分り切つてゐるものを、出ようとするのは無理だ。無理を通さうとするから苦しいのだ。つまらない。自ら求めて苦しんで、自ら好んで拷問に罹つてゐるのは馬鹿げてゐる。

「もうよさう。勝手にするがいゝ。がり〱はこれかぎり御免蒙るよ。」と、前足も、後足も、頭も尾も、自然の力に任せて抵抗しない事にした。

次第に樂になつて來る。苦しいのだか、有りがたいのだか、

見當がつかない。水の中に居るのだか、座敷の上に居るのだか、判然しない。どこにどうしてゐても差支はない。只樂である。否、樂そのものすらも感じ得ない。日月を切落し、天地を粉韲して不可思議の太平に入る。吾輩は死ぬ。死んで此の太平を得る。太平は死ななければ得られぬ。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。有りがたい、有りがたい。（吾輩は猫である）

アブラハム、リンカーン Abraham Lincoln　北アメリカ合衆國第十六代の大統領。